

高崎北高校図書委員会
本のむし
 令和4年度第5号 2022年10月25日発行
 読書週間特集

秋は、本との
 出会いの季節!

図書委員☆オススめの本特集

『王とサーカス』米澤穂信・著(東京創元社)

2001年、新聞社を辞めたばかりの太刀洗万智は、知人の雑誌編集者から海外旅行特集の仕事を受け、事前取材のためナバルに向かった。現地を知り合った少年にガイドを頼み、穏やかな時間を過ごそうとした矢先、王宮で国王をはじめとする王族殺害事件が勃発する。太刀洗はジャーナリストとして早速取材を開始したが、そんな彼女を嘲笑うかのように、彼女の前にはひとつの死体が転がり…。「この男はわたしのために殺されたのか？あるいは一疑問と苦悩の果てに太刀洗が辿り着いた痛切な真実とは？実際に起きた王宮事件を取り込んで描いた壮大なフィクションにして米澤ミステリーの記念碑的傑作！冷静で少し冷徹な一面を持つ太刀洗と共に進んでいく物語。読むにつれて人のあらゆる面を知ることになる。またジャーナリズムについても深く考えさせられる一作でもある。今、ウクライナでの戦争や、日本でもある問題が大きく世間を賑わせている中、報道のあり方、マスメディアのあり方にも注目が集まっているように思える。異国でのミステリーを楽しみながら“真実”を太刀洗と探してみてもいい？

この一冊に、ありがとう

2022 第76回 読書週間
 10月27日～11月9日

読書週間とは読書推進運動協議会が中心となって10月27日(文字・活字文化の日)から11月9日(文化の日)を中心とした2週間)にかけて、学校や公共図書館、新聞や出版団体が本にまつわる行事を開催して読書の普及活動を行うものです。本校でも図書委員による推薦図書を紹介や関連行事として小講演会を予定しています。

『花や咲く咲く』あさのあつこ・著(実業之日本社)

太平洋戦争下で生きる、自分と同年代の少女たちの物語です。昭和18年の初夏、主人公の三美美は偶然手に入れたきれいな布で、仲の良い友だち三人と笑い合いながらブラウスを縫っていきます。しかしその一方で太平洋戦争はどんどん激化していきます。この本はそんな戦時中の少女たちの青春小説です。私はこの本を読んで、今とは違えど、大人の目を盗んで何かをしたり、甘いものや美味しいものを食べて笑い合ったり、自分たちと同じようなことをしていたと考えると当時の学生やこの本にとっても親近感が湧きました。しかし、友達や家族、自分の命が危険と隣り合わせであること、自分のやりたいことが自由に選べない、できないことや他にも犬まで国に渡さなくてはならないことが現代を生きる自分には考えられない、異様なことだと思いました。また彼女たちが笑い合っているシーンと空襲のシーンとの対比で、より戦争の残酷さを肌で感じることができました。

この本は戦争下の青春が描かれているので、戦争小説に抵抗がある人でも読みやすく、様々なことを考えさせられます。ぜひ『花や咲く咲く』を読んでみてください。

『カゲロウデイズ』じん(自然の敵P)・著(KADOKAWA)

「折角ピリオバトル1位取ったのならそっちを紹介しろ」とか思われるかもしれませんが、ゴリゴリのラノベを紹介してみようと思います。みなさんは、ボカロが好きですか？タイトルと著者でピンときた人もいると思います。そうです、あの方です。あの、アニメ化もされた伝説のやつです。内容としては、カゲプロの楽曲とリンクした、ちょっと不思議な能力を持った、とても愉快な人たちの話です。読んでみると「ああああの曲や!!(歓喜)」とか「ここはどの曲のエピソード…?」とか「公式の解釈」が見られてより一層理解が深まって楽しいです。愉快な人がたくさん出てくるので、誰か一人は好きなキャラができます。「いやオタクがラノベ語ってるだけじゃん?」と思われるのも仕方ないと思います。でも、十代のうちでしか感じられない熱みみたいなものがこのシリーズにはあると思います。時間がある今だからこそ、読んでみてください。大人は「真面目な本を読む」と言いますが、好きな本を読んでいれば知識も語彙も勝手に身につきます。手始めに読んで、「目」を奪われちゃってください。

※書影「版元ドットコム」より。

『屍人荘の殺人』今村昌弘・著(東京創元社)

「神紅大学ミステリ愛好会の葉村譲と会長の明智恭介は、いわくつきの映画研究部の夏合宿に加わるため、同じ大学の探偵少女、剣崎比留子と共にペンション紫瀛荘を訪れた。合宿一日目の夜、想像しなかった事態に遭遇し紫瀛荘の立て籠もりを余儀なくされる。緊張と混乱の一夜が明けると、部員の一人が密室で惨殺死体となって発見される。しかしそれは連続殺人の幕開けに過ぎなかった…」

この本は単なるミステリー小説ではありません。あらすじにもある想像しえなかった事態こそがこの本の特別どころ、目玉でもあります。私が初めて読んだミステリー小説で、私にとって「ミステリー」というジャンルの火付け役です。著者の今村昌弘さんはこの本がデビュー作ながら多くの賞を受賞しました。続編である『魔眼の匣の殺人』、『兇人邸の殺人』も出版されています。本はあまり読まない、ミステリーはありきたりという人でも全く問題なく読める作品になっていますので、ぜひ手にとってみてください!

『博士の愛した数式』小川洋子・著(新潮社)

この本は記憶が80分しかもたない元数学教師の博士が、ある家族と出会う話を書いています。物語の中ではよく数学(とくに整数)についての話が引き合いに出されます。でも難しくないので、普通に読むことができます。また博士は野球も好きなので、数学が好きな人だけでなく、野球が好きな人にも読んで欲しい一冊だと思いました。

『神のダイスを見上げて』知念実希人・著(光文社)

これはある図書館で出会った本です。表紙がとても綺麗で男女ふたりが公園のブランコで空を見上げているという、恋愛もののストーリーかと思われれます。でも主人公の漆原亮は姉を殺され、犯人を自らの手で殺そうとする残酷なストーリーとなっています。殺すのに銃を使おうとするのですが、なぜか発射し撃てないオンボロ銃を使わざるを得なくなるというのが個人的には面白かったなと思います。しかも主人公が1千万円のお金を持ち歩くというこれもまた羨ましいなと思いました。

この本で私も主人公になったような気分で楽しく読めたと思います。殺人ミステリー系の本が好きだったり、著者の知念実希人さんの本を読んだことのある人にはオススメです。

『怖ガラセ屋サン』澤村伊智・著(幻冬舎)

この本は「誰かを怖がらせてほしい」という依頼を受ける、正体不明の女性「怖ガラセ屋サン」を巡る短編集です。話ごとに怖ガラセ屋サンの関わり方が違い、それぞれの関わり方を考えるのも面白いです。私が好きな話は第六話の「見知らぬ人の」です。この話はくも膜下出血で入院した男性が主人公です。男性はお見舞いに来る妻に、今日あったことを話す練習をしていました。ところがある日、妻から同じ病室にいる男性の見舞客の言動がおかしいと話されます。どの話とも不気味で、いろいろな恐怖について書かれています。ぜひ読んでみてください。

『緋色の研究』コナン・ドイル・著(新潮社)

私が今回紹介させていただく本は、『緋色の研究』というコナン・ドイルが生み出した名探偵シャーロック・ホームズと助手のワトソンの出会いとその後に起こる殺人事件が描かれた長編小説です。物語は元陸軍軍医でアフガン戦争から帰還したワトソンが新しく家を探していた途中で再会した友人に紹介された、変わり者・ホームズとの共同生活から始まります。ホームズとワトソンが奇怪な事件の真相に迫っていく、とても楽しめる作品です。興味がある方、ぜひ手に取っててください。

『一流の頭脳』アンダース・ハンセン・著(サンマーク出版)

最近、だるい、うつ、ストレスがたまる、集中できないなどの事があるませんか？そんな悩みを解決したいと考えている人にオススメな本、『一流の頭脳』。実験に基づいて一流の脳を作る方法を知ることができます。書かれている内容は、実験に基づいているため個人の意見ではないので、信憑性が高い本となっています。自分の脳を変えたい人、変わりたいと思う人は、ぜひ読んでみて、脳を一転してみたいかでしょうか。

※図書館にない本も相互貸借(他館借り受けサービス)でご用意できる場合があります。

新着図書案内 10月

書名	著者名	出版社	請求記号
君は君の人生の主役になれ	ちくまプリマー新書 鳥羽和久	筑摩書房	159
昭和の戦争 日記で読む戦前日本	講談社現代新書 井上寿一	講談社	210.7
まだ、法学を知らない君へ	東京大学法学部	有斐閣	321
超圧縮地球生物全史	ヘンリー・ジー	ダイヤモンド社	460
新しい世界の資源地図	ダニエル・ヤーギン	東洋経済新報社	501
ミトンとふびん	吉本ばなな	新潮社	913.6
どうかこの声が、あなたに届きますように	文春文庫 浅葉なつ	文藝春秋	913.6